

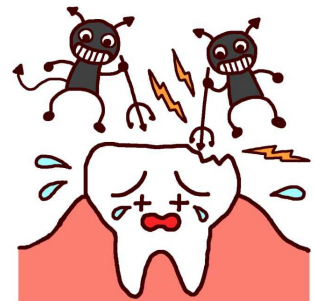
北京で歯医者に行ってきました

北京事務所

永久歯初の虫歯

実家のある街に住む親戚に2代にわたって歯科医がいるにもかかわらず、一度もお世話になったことがない。永久歯に生え変わった以来、虫歯というものには無縁で、斜め下に向かって伸びようとした、文字通り親知らずな親知らずを1本、抜いただけなのである。

そんな筆者だが、あろうことか北京で虫歯を発見した。奥歯に違和感があって、さわってみると、自分でも分かるくらいおおきな穴ができています。



情報誌と先達が頼り

こんなときに頼りになるのが、家族のいる駐在員と無料で配られている生活情報誌。文字通り根掘り「葉」掘り調べて、日本語で診察が可能な医院で、日本と同等の治療を行うことで評判のよい歯科医院にお世話になることにした。

それにしても事務所の職員は、怖がる筆者を面白がってか、中国では診療費を稼ぐために多めに削らしいとか、歯科衛生士という資格がないので慣れない看護師による処置ミスが怖いとか、衛生管理のしっかりしたところを選ばないと大変なことになるとか、挙げ句には中国人スタッフまで一緒になって、いろんな情報を吹き込んで、小心者を脅すのである。

いやもちろん、当人たちは心配して教えてくれていたのだろうが、恐怖心に凝り固まって、素直になれない筆者がいた。

日本語での受診

そんなこんなで、40数年ぶりの歯科治療に怯えながらも、予約の電話を入れた。日本語で症状を伝え、予約したい旨を伝え、残念なことに翌日に予約がとれてしまった。外国で病院に行くこと自体、すごいストレスだが、歯科医はそのなかでもおそらく最も怖い。一度だけ大学生時代にアメリカで手首の捻挫に湿布薬をもらったことはあるが、言葉が通じなくても済む程度だったのに対し、歯科医となると、言葉が通じなければ、何をされるかわからないまま恐ろしい行為が始まって、恐怖が倍増する。どうしても日本語で診察、治療を受けたいと強く思ったわけである。

意外にあっけなく

案ずるより産むが易し、まさにそのとおりで、麻酔の注射も痛くも痒くもなく、治療は

音だけが恐怖心をおおるものの神経は何も情報を伝達しない、全く痛くない。そのまま初日が終了。2回目、3回目には随分と慣れて、脂汗を流すことも、全身がこわばれることもなくなって、先生から褒めてもらった。

先生さようなら

さて、神経を処置し終わった3回目の治療のあとは、埋めてかぶせるだけなのだが、先生から、翌日にはご帰国という事実を告げられて、愕然としてしまった。いつも優しい言葉をかけてくださった先生の治療はもう受けられないのだ。また一から怖い思いをしなければならない、気が滅入りそうになった。

就労ビザの関係や外国での生活が長期化しないようにという配慮などもあって、先生方は必ずしも北京に常時駐在されているわけではないとのこと。次の治療はどうか、出張や風邪、一時帰国もあって第2段階に踏み込めていない。いっそ、先生が次回お越しになるときまで待とうか、今もモジモジ悩んでいる。いずれにせよ北京での歯科通いは当分、続きそうだ。

(平澤次長 兵庫県派遣)

